氏名	島根　朋史
ヨミガナ	シマネ　トモフミ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第342号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 18世紀フランスのチェロ演奏における読譜と奏法について ―デュポールとヴィオルを含む低音弦楽器奏者による弓の技巧、ポルタメント、アポジャトゥーラ、ヴィブラートなどの装飾、演奏表現への考察― 〈演奏〉 J.-L.Duport: Cello Concerto No.6 (25″00)ほか

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	河野　文昭
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	土田　英三郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	玉井　菜採
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	中木　健二
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師	（音楽研究科）	鈴木　秀美

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、18世紀末から19世紀前半にかけて活躍したフランス人チェロ奏者、ジャン＝ルイ・デュポール（Jean-Louis Duport, 1749-1819）と、それ以前のフランスにおける低音弦楽器奏者たちの読譜法と奏法を研究し、それを基にデュポール自身の作品や、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven, 1770-1827）のチェロのために書かれた室内楽作品を分析し、楽譜上から読み取れる想定された奏法、楽譜に書かれていない範囲の奏者に求められる即興性、また作曲当時に用いられていたと考えられる技巧などの知識とアイディアを得ることである。

デュポールは、ベートーヴェンの《チェロとピアノのためのソナタ 作品5》を初演した人物であるだろう――とされ、若きベートーヴェンが初めて取り組んだ《二重奏ソナタ》というジャンルの作品において、多大な影響を及ぼした演奏家だったと考えられている。よってデュポールの奏法は、ベートーヴェンの作品を演奏する際に、弦楽器奏者はどのような奏法で演奏されるべきであるか、どのような演奏表現の可能性が考えられるかという領域において、非常に有益な情報である。

とりわけデュポールの奏法の中で誤解されてきた事柄は、ポルタメントの排除だった。デュポールは、それまでの時代には全く確立されていなかったチェロ演奏における運指法、また運弓法などにおいて、現代に通じる奏法の指針を打ち立てたチェロ奏者の1人に数えられるが、フランスにおいて18世紀前半まで多大なる繁栄を極めたヴィオル（またはヴィオラ・ダ・ガンバ）をライバル視するあまり、デュポール以前のチェロ奏者たちはヴィオルの優れた運指法などを学ぼうとはせず、ヴァイオリンの運指法を無理やり真似てきたとされている。その、誤った運指法を正そうとするが故に、教則本の中では左手の同じ指の連続使用を禁止する強い呼びかけが為されている。しかしその一方で、実はデュポールは、ポルタメント奏法とその演奏表現については、肯定的に認めていたのである。

本論文中ではその他、18世紀前半にマラン・マレをはじめとする、ルイ14世のもとで演奏をしていたヴィオル奏者たちや、18世紀半ばにヴィオルからチェロに転業した人物たちの奏法や装飾法なども研究し、デュポールの世代の奏法例と比較することで、一貫していること、変化していったことなども、詳述した。特に、アポジャトゥーラや、アポジャトゥーラの用法で書かれた前打音については、筆者の修士論文（「バロック時代の読譜法・奏法を基に考察した古典・ロマン派の作品における可能性」東京：東京藝術大学大学院、2017年）の研究に、さらに重ねる形で、新たな発見があった。すなわち、ヴィオルの時代から使用

されていた、緊張した音の後に発せられる、人声の自然な震えを模倣した、いわゆるヴィブラートに相当する表現方法などの装飾を生かしということである。これを18世紀半ばから後半に至る作品においても用いることで、新たな演奏表現の可能性を見出す結果が得られた。

また、ベートーヴェンが《作品5》を作曲するに際し、チェロの奏法を学んだメモとして記録が残っている『カフカ雑録』第109葉目の表（fol. 109r）第1～7段における、チェロの音階の運指、重音奏法、その他順次進行の運指の書き込みは、長年デュポールによってベートーヴェンへ伝えられたものだとされてきたが、近年それが誤りだったとする声があがっている。筆者もその声に賛同する1人であるが、『カフカ雑録』における音階の指づかいと、デュポール、及び同時代のその他のチェロ奏者、すなわちフランスにおいてチェロ教則本を書いているフランソワ・キュピ（François Cupis [de Renoussard], 1732-1808）とジャン＝バティスト・ブレヴァール（Jean-Baptiste [Sébastien] Bréval, 1753-1823）の2人、加えてベートーヴェンが青年期を共に過ごしたと言われているドイツ人チェロ奏者のベルンハルト・ロンベルク（Bernhard [Heinrich] Romberg, 1767-1841）、この合計4人のチェロ奏者の運指法の特徴と、『カフカ雑録』による音階を比較検討した。これにより、デュポールが運指法において革新的な意見を打ち立てたことが浮き彫りとなった。

運弓法においても、現代の一般的な運弓とは異なる、デュポールと同時代の著名なヴァイオリン奏者、ロドルフ・クロイツェル（Rodolphe Kreutzer, 1766-1831）の奏法としても関連する、レガート奏法についても触れた。

最終的に浮かび上がったデュポールの演奏家としての人物像と、デュポールが行ったであろう奏法の可能性を考察する中に、実際に作品を読譜していく上で、本論文中最終部では、ベートーヴェンの作品において、演奏表現に関係する個所での楽曲分析を行っている。

（総合審査結果の要旨）

島根朋史の学位論文「18世紀フランスのチェロ演奏における読譜と奏法について」は、ジャン＝ルイ・デュポールによる教則本(1806)とその作品、同時代の周辺のチェロ奏者たちによる教則本と作品、デュポールとベルリンで出会いチェロソナタの創作へと向かったベートーヴェンの作品を検証し、今日における古典派･19世紀前半のチェロ作品の解釈と演奏表現の可能性について論じた力作であり、演奏家による博士研究としては意羨深く、さらに画期的な内容を持っている。特にデュポールのチェロ教則本（仏語）を精読し、ヴィオル奏法では存在したポルタメントやヴィブラートがチェロ演奏の際にも推奨されている点に着目、ヴィオルの奏法とチェロの奏法に大きな関連性があることを指摘している。これは島根本人がヴィオラ・ダ・ガンバもよく演奏することから生まれた着眼であろう。ヴィオル奏法は当時のチェロ奏者によって無視される傾向にあったことを問題視し、双方のメソッドの繋がりを論じたことは新鮮であり、おおいに評価できる。その他にも教則本で述べられている運指法、運弓法、スラーの演奏法、装飾音、そして即興性や修辞学との関連等、演奏上の諸問題に対して丁寧な解説と論考がなされており、この研究が本人の新たな演奏解釈を生み出すだけではなく、今後に続く他の演奏家のために大きなヒントを与えるものとしての期待も大きい。

ただ論文執筆の技術的な諸問題や不備が各所にあり、論文の最終ヴァージョン提出までに修正されることが望まれる。後進のチェロ奏者たちにとってより有益なものになるために、デュポールの教則本の全訳や、本論で取り扱った作品の研究結果をもとにした運指、運弓、演奏解釈等を盛り込んだ、実用版としての校訂楽譜の作成なども、今後の課題として試みてほしい。

学位審査演奏会は、デュポールの協奏曲第6番とベートーヴェンのソナタ第3番が演奏された。協奏曲ではデュポールの目指すヴィルトゥオーゾ的なパッセージに果敢に挑み、ベートーヴェンではフォルテピアノとのアンサンブルの親密さを求めるなど、大きな意気込みを感じさせる演奏ではあった。ただ本論文での研究成果の一つである運指やボウイングの試みは見られたが、例えばソナタの第2楽章において、タ

イで結ばれた2つの四分音符に意図的に違う指を使う運指などは演奏効果を上げていたとは言い難く、またポルタメントの使用が真に音楽的な表情と結びついていたかどうかの疑問が残る部分も見受けられた。また何より基礎的な技術力の不足による楽器演奏の不安定さは、全審査委員から指摘された。論文の内容が充実しているだけに惜しまれる演奏となったが、今後チェロ奏者として演奏技術のさらなる向上を目指し、論文での研究が演奏を通しても大きな説得力を生むようになるまでの研鑽を望みたい。

しかしながら総合的には、様々なチェロ奏法への指針を示し、新たな演奏表現の可能性を感じさせる有意義な研究がなされており、高い評価に値する。よって、成績を優、合格とした。